

看護学部卒業式・大学院看護学研究科学学位授与式

2024年3月18日（月）に2023年度看護学部卒業式・大学院看護学研究科学学位授与式を開催し、学部生103名、大学院生19名が卒業・修了の日を迎えました。

会場には、保護者の皆様をはじめ、実習でお世話になった医療機関の関係者の方々や、地域の教育ボランティアの皆様がご参列くださり、あたたかい雰囲気の中卒業生・修了生の旅立ちを祝いました。



～2023年度国家試験合格率～

看護師	99%
保健師	100%
助産師	100%

合格おめでとうございます

学長挨拶

学長 江川 幸二



神戸市看護大学は2年後の2026年に開学30周年を迎えます。

欧風のキャンパスですが、さすがに老朽化してきていますので、現在、回廊の柱や天井などを全面的に補修し塗装もしております。また学生会館の南側のウッドデッキも改修致しました。今後も設置団体である神戸市の支援を得て、素敵なキャンパスを維持していきたいと思っております。

また、本学はあたたかみのある雰囲気の建物だけではなく、看護教育においても人に対する思いやりや温かさを大切にし、実践能力を育成することに力を入れています。さらに地域住民の皆様の健康課題に向き合い、行政の協力や地域の社会資源を活用しながら、新たな地元創成看護学の確立を目指しているところです。

地元創成看護学とは、2020年に日本学術会議の看護学分科会が提言したものです。地元の人々が課題解決に向けた方策を自ら考え創っていくことを可能にするような教育を、現在の本学の実習を中心とした科目に取り入れています。

今後のさらなる発展に期待していただければと思います。

現在、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができる」ための地域の体制づくりが進められています。本学でも、様々な授業や実習で、体制づくりに貢献できるような教育に取り組んでいます。それらの授業のうち、地域の方々が学生の教育に関わってくださる3年生科目、「在宅療養支援論 I」をご紹介します。

3年生は9月末から訪問看護の実習が始まります。座学では家族の介護経験を学びますが、学生に実体験をもつ者は少ないのは当然のことです。本学には、教室までおいでいただき授業に参加する「教育ボランティア」登録制度があり、地域の方々が2024年度は約70人参加して下さっています。そのボランティアさんの中で、家族の介護経験のある方にご参加いただき、介護経験に関する学生の質問に答えていただくグループワークを授業の一環として行っています。学生は、教育ボランティアさんが実際に経験した家族介護経験をうかがえる機会を得ます。また、座学で学んだ内容を反映して質問項目を考えるので、看護職として適切な会話の仕方を学ぶ機会になります。学生同士や教員が患者と看護師の役割をしたり、患者人形を用いて演習するのは、良くも悪くもふりかえりができます。その後、学生たちは訪問看護ステーションなどに実習へ行って、良くも悪くも患者の方々から学生が行った看護に対する直接的な反応を得ます。教育ボランティアさんにお話を聞かせていただくなどの関りは、ちょうど演習と実習との間の、学生が外部の方々から直接的に反応をいただく機会となります。授業後に一部の学生は「実践的なコミュニケーションのとり方を学ぶ貴重な機会」と感想を述べていました。

教育ボランティアの方々から看護学生へ関わっていくこの学習方法を続けていきたいと思っておりますので、地域の皆様、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



教育ボランティアさんから介護経験をうかがっています



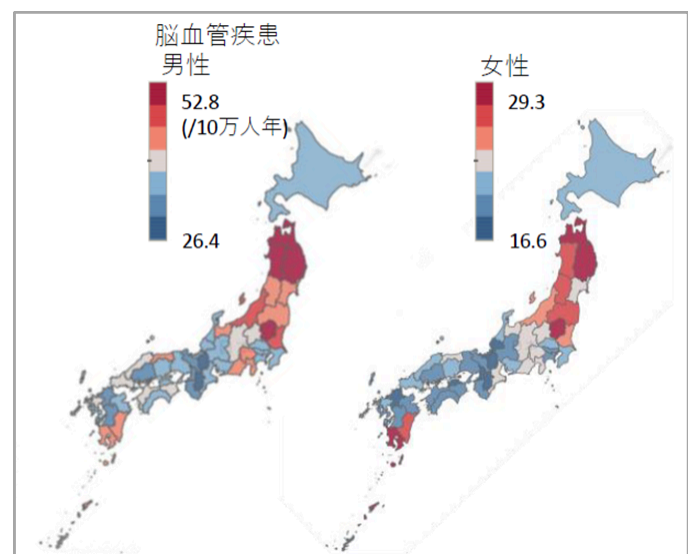
教育ボランティアさんが学生のまとめを聞いてくださいました

「個人」だけではなく「集団」もみて健康づくり対策を考える

公衆衛生は、人の集団を対象とし、病気にかかる人を減らして、地域の健康度合いを高めようとする科学・技術です。最近の研究で、病気のなりやすさに、各地域の医療サービスの充実度合い等、住民個人の努力だけでは解決できない課題が影響することがわかってきました。

健康に影響する要素を幅広く把握することは、行政に関わる保健師等はもちろんのこと、病院で働く看護師等にとっても重要です。

2023年度、学部4年生の研究演習では、動脈硬化が原因で発生する脳血管疾患と心筋梗塞による死亡率について、都道府県ごとに差があることを“見える化”してもらいました。このように、授業や研究を通じて公衆衛生に関連する最新知見を共有し、看護職はどんなことができるのか考えていきたいと思っております。



都道府県別にみた脳血管疾患死亡率の分布
死亡率は、赤が濃いほど高く、青が濃いほど低い

急性期看護学分野 森山 美香 教授

4月から急性期看護学分野に着任しました森山美香です。

出身は、縁結びの神様で知られている島根県出雲市です。実家は出雲大社に近く、車で10分くらいのところにあります。実家では柴犬を飼っています。神戸には連れてくるのが出来なかったことが残念です。ラインで送ってもらう愛犬の写真に癒されている日々です。今は不慣れなことも多く、旅行などをする時間がありませんが、余裕ができたなら旅行に行きたいと思っています。

社会福祉学分野 岩本 華子 准教授

本年4月に専門基礎科学領域社会福祉学分野で着任しました岩本華子です。

私は市町村における困難な状況におかれた女性に対する社会福祉の支援（ソーシャルワーク）を研究しています。本学では、社会福祉に関する制度だけではなく、社会福祉の実践についても学生のうちから理解を深め、実践の場で求められる多職種連携の学びに寄与していきたいと思っています。よろしくお祈いします。

人文科学分野 城田 純平 准教授

講義で学生さんに「哲学のイメージは？」と聞くと、必ず「難しそう！」という答えが返ってきます。しかし、ケアの問題、いのちの問題などのトピックを検討していくと、次第に哲学・倫理学と看護学との深いつながりに、受講生の皆さんも気がついていきます。そのつながりの根元にある、AIに答えを出してもらうことのできないような、人間の生き方そのものへの問いに、本学での研究・教育を通して向き合っていきたいと考えています。

ウィメンズヘルス看護学分野 子安 恵子 助教

今年度より健康生活看護学領域ウィメンズヘルス看護学に着任いたしました。

看護師、助産師として新生児集中治療室（NICU）や産婦人科等で経験した後、兵庫県や滋賀県の大学で教員として勤務しておりました。授業や実習を通して学生の皆さんと共に学ぶことを楽しみにしています。看護過程を展開し、個別的なケアの実践につなげられるよう、お手伝いできればと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

基礎看護学分野 赤松 由希絵 助教

4月に基礎看護学の助教に就任しました。大学病院で12年間の臨床経験を積み、そのうち4年は一般病棟、8年はICUで看護師として勤務していました。患者様とその家族から学んだことを臨床の看護教育に活かしてきましたが、これからは学生と共に成長し、学びに貢献したいと考えています。研究活動としては、臨床経験を生かした看護研究に取り組んでおり、学生の皆さんにも研究を通じて、看護の質の向上と患者ケアの改善につながる知見を得ることを目指しています。

いちかんダイバーシティ看護開発センター 藤本 佳子 特任講師

私は本学の2期生です。卒業後は、看護師、保健師、養護教諭、臨床心理士として勤務をしてきました。本学では、兵庫県からの受託事業である兵庫県保健師キャリア支援センターで、県下の保健師の研修やキャリア支援を担っています。また、いちかんダイバーシティ看護開発センターで、神戸市子育て支援拠点「コラボカフェ」の運営支援、オンライン看護相談などの活動をしています。両センターの活動はHPで紹介していますので、ぜひご覧ください。

自治会からのメッセージ

前自治会長 伊藤 羽菜

神戸市看護大学自治会では学生の自主性の確立をモットーにあざみ祭の運営や新入生歓迎会の企画を行っています。頼りになる事務局の方々とも力を合わせ、活動しています。参加のハードルは低く、私自身、高校や中学で委員会すら参加したことがなかったのですが、無事任期を満了することが出来ました。

今まで興味はあったけど参加するのが怖いと思われるような方でも大丈夫です。大学生活ならではの隙間時間を活用し参加してみませんか？自治会役員をしていたという経験は就職でも有利な面が多いです。

まずは見学からでも良いので自治会に興味を持ってみませんか？



学部卒業生からのメッセージ

神戸市看護大学 博士前期課程 看護管理学分野 木戸 菜々美

私は大学卒業後、そのまま大学院に進学しました。その理由は、大学での実習を通してチームにおける協働、特にフォローシップの発揮について学びたいと思ったからです。大学院での一番の収穫は、授業やゼミでの発表を通して、人にわかりやすく伝える力を養えたことです。先生方からは、伝えるために必要な中立的な物事の見方も教わり、自分の偏った考え方に気づききっかけになっています。

また、看護師経験豊富な同期から看護の「リアル」を教わることも貴重な経験です。色んな人との出会いのなかで、大学とは違った学ぶ楽しさがあると感じています。

退職教員からのメッセージ

藤代 節 名誉教授

28年間の在職中は一週間にほぼ6日キャンパスに通い、研究室で言語学に取り組んだり、時に大学運営の一端を担う機会を楽しんだり(?)、コミュニケーション論他の授業では常に直前まで準備にドタバタしたり、毎日違うのだけれど、同じように過ごしていたようにも思います。

新年度が明けてからは、ロシア民謡として知られている「一週間」(露語題名 Неделья、以下の引用和訳は楽団カチューシャによる)のように「日曜日は市場に出かけ、糸と麻を買ってきた」、「月曜日はお風呂を焚いて」、「火曜日はお風呂に入り」・・・、何か一つしたら、その日は終わりという毎日です。

撮りためた看護大学の美しい四季の写真を時々眺めつつ、徐々に自分が離れていくことを実感しています。と言いながら、「理系学部受験に女子学生優先枠を創設」と新聞で読めば、「看護学部に男子学生優先枠を創設」という記事が無いのは一体どうしてか？学問分野に性別の向き不向きは無いはずだし、いっぺん男子学生優先枠を作ってはどうかしら！と思ったり・・・ 大きなお世話じゃと言われそうですね。でも、愛してやまぬ神戸には、現状を常にしなやかに打開していく看護大があることを頼もしく思い、これからも大いにその発展に期待しています。

28年間どうも有難うございました。皆様、どうぞお元気でご活躍下さい！